

平成24年度

”萌える天北オロロンルート”活動報告

1. ルート運営活動計画の進捗状況
2. 活動団体の活動状況及び課題
3. ルート運営活動計画の推進体制の状況及び課題
4. ルート運営行政連絡会議の取組状況及び課題
5. 平成23年度活動報告への助言に対する状況報

参考資料1 これからのプロジェクト

(1) プロジェクトの構成

活動のテーマ		『暮らしぶりの映し。北の光が続く道。』														
		ルート運営活動計画方針														
		1.景観			2.食			3.環境保全			4.レクリエーション			5.歴史・文化		
ルートストーリー（将来展開）		萌える天北オロロンルートには、この地の風景を楽しむために多くの人が訪れています。地域の人々は、沿道に花を植え、見苦しい看板や廃屋を取り除き、また、地域にふさわしい建物や施設のデザインを検討しながら、ルートの風景に愛着と誇りをもって、様々な取り組みを継続的に進めます。			萌える天北オロロンルートでは、まず自らが自然の恩恵である地元の食材を味わい、楽しむために、生産者と消費者が一体となった地域ぐるみの活動を展開します。また、さらに多くの人たちに味わってもらうために、その魅力をPRし、新しいメニュー作りにも取り組みます。このような活動を通じて地域ブランドを構築し、この地域の「食」が全国、全世界へと発信します。			萌える天北オロロンルートでは、CO2削減に向けた新エネルギーの導入や、身近なゴミの問題、そして地域の生態系を守り育てる活動などを通じて自然との共生を実践し、環境先進地域として、他に先駆けた取り組みを進めます。			萌える天北オロロンルートでは、私達が楽しんでいるアウトドアスポーツやカルチャーメニューを一つ一つ丁寧に用意するとともに、迎える側としてのホスピタリティを充実し、地域と訪れる人々との間に笑顔と暖かい交流を世界へと広げます。			萌える天北オロロンルートでは、先人から受け継いだこれらの貴重な資源を守り育て、そして、過去から現在にいたる悠久の物語を語り継ぎます。また、この地ならではの気象や地形、また人々の気質や共有される価値観に根ざした生活文化を将来に伝えます。		
基本方針		愛着と誇りを持てる郷土の景観の保全と創出			自然の恩恵である地元食材のブランド化と魅力の発信			地域に優しい『くらしぶり』のお手本づくりと促進			暮らしに根ざしたもてなしによる暖かい交流の魅力づくり			先代の暮らしぶりや新たな価値観を将来に伝え楽しむ		
基本方針におけるキーワード		風景との出会いの演出	花とみどりの景観づくり	愛着と誇りの醸成	地域産品の魅力づけ	新しいメニューの企画	地域ブランドの構築	クリーンエネルギーのイメージづくり	ゴミ対策の取り組み	身近な生態系の保全・復元	ロングドライブのサポート	身近なアウトドアの紹介	各種カルチャー活動による交流	歴史資源の保全と活用	次世代への歴史伝承	独自の生活文化の発見
プロジェクト	1.フォトコンテスト	●											●			●
	2.エソカンゾウ植栽活動		●							●			●			
	3.景観診断	●		●							●					
	4.菜種油・ヒマワリクリーンエネルギー	●	●					●					●			
	5.フォーラムの開催	●					●	●			●			●		
	6.食材オーナー制度				●	●	●									
	7.萌天の森		●					●		●	●					
情報受発信（全項目に関係）		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
長期展望	〈想定〉ルートを満喫できるツアー	●			●			●			●			●		
	〈想定〉萌天グッズの企画・開発						●				●					●
	〈想定〉食と観光の情報デスク	●				●					●			●		



1. ルート運営活動計画の進捗状況

ルート名称: 萌える天北オロロンルート	報告者: 代表 西 大志	報告年月日: 2013/3/31
---------------------	--------------	------------------

[illegible]

活動名：ひらめ底建網オーナープロジェクト

【概要】今年で5回目を迎える「ひらめ底建網オーナーin遠別」を開催。この取り組みは、当ルートの遠別漁協、遠別産業振興公社、そして留萌市のエフエムもえるが協力して、遠別の特産であるヒラメを地元はもちろん、全国に発信し、ブランド力を高めるためにオーナー制度を実施。オーナーは、漁イベント当日に揚げたヒラメや雑魚を山分けする。今年は天候にも恵まれ、例年通り、優先枠オーナーの猟場見学や、地域物産品の販売、ひらめの捌き方教室などのイベントを実施。乗船できない一般枠のオーナーも全道各地から訪れ、各々用意した発泡スチロールにひらめや他の魚を持ち帰るなど、イベントを楽しんだ。オーナーは全国各地から応募があり、札幌などの道内都市でも徐々に遠別のひらめのブランド化が定着しつつある。

課題として、オーナー以外の一般参加者を増やす仕組みなどが挙げられる。

【日時】平成24年6月16日（土）

【場所】遠別漁港

【主催】ひらめ底建網オーナーin遠別実行委員会

【参加人数】800名（主催者80名、一般参加720名程度）



獲れたてのひらめと船長



漁の様子



地域特産品の販売



新鮮なひらめを手に
喜ぶオーナー



水揚げされたひらめ

活動名：情報受発信プロジェクト

【概要】地域情報の「どこ？」をビジュアルで伝える「オロロン手書きマップ」を発行し、好評を得ている。過去のストックを基礎としながら、情報収集作業により築いた地域とのゆるやかな関係性により、他に類を見ない留萌管内全市町村が統一のイラストマップ（留萌観光連盟製作）を実現し、管内に徐々に広がっている。留萌振興局の協力により、管内の一部観光施設に設置されているコカ・コーラの自動販売機に掲載されている他、羽幌のフェリーターミナルや、管内宿泊施設等で独自に、拡大した大きさのオロロンマップを配置するといった機運も生じている。地元の方の声として、非常にわかりやすく、また、親しみやすいデザインで、訪れた方にも好評とのお話をいただいております、マップを通して、地域内の連帯感が徐々に生まれつつある。今後、改訂版を発行し、さらなる発展を目指す予定である。

【日時】 通年

【場所】 留萌管内全域

【主催】 るもい観光連盟

【参加人数】 ー



オロロン手書きマップ



るもいfanフリーペーパー：毎月発行

活動名：フィルムコミッションから学ぶ新たな観光開発事業プロジェクト

【概 要】 留萌中部地域が近年ドラマや映画、ドキュメンタリーの舞台としてロケや取材が多数行われていることから、北海道西海岸の温暖でさわやかな風土や文化、歴史が注目されている現状にある。フィルムコミッションから学ぶ地域資源の掘り起こしと今後の具体的な活動を模索し、地域に眠っている北海道でもポテンシャルの高い西海岸地域の資源、風土を活かし地域経済の活性化の方向性を探ることを目的とした活動を実施。Facebookを活用した情報発信やフォトコンテストの開催などに取り組んだ。フォトコンテストの開催では、応募期間約2ヶ月間と限られた時間の中で、合計80件の作品応募を受けることが出来た。現在、Facebookを通して、フォトコンテストの結果など、様々な情報発信に取り組んでおり、1月下旬から2月下旬にかけて、3町村にて作品の巡回展を実施する予定である。今後は、集めた作品や素材をプロモーション等どのように生かしていくのかが課題となっている。

【日 時】 平成24年6月1日～平成25年2月28日

【場 所】 苫前町・羽幌町・初山別村

【主 催】 苫前町商工会

【参加人数】 100名（主催者名10名、一般参加100名程度）



Facebookを通じた情報発信



フォトコンテスト募集要綱



最優秀作品『羽幌漁港夕景』

3. ルート運営活動計画の推進体制の状況及び課題

ルート名称: 萌える天北オロロンルート	報告者: 萌える天北オロロンルート 代表 西 大志	報告年月: 2013/3/31
---------------------	---------------------------	-----------------

活動団体
増毛町観光協会、増毛漁業協同組合、増毛町商工会、ゆうゆうマーシーの会、豊かな森川海人をつくる増毛実行委員会、新星マリン漁業協同組合、南るもい農業協同組合、留萌商工会議所、社団法人留萌青年会議所、留萌観光協会、エフエムもえる、小平町観光協会連合会、小平町商工会、NPOラシス・オビラ、小平行来、苫前町観光協会、苫前町商工会、苫前町農業協同組合、北るもい漁業協同組合、羽幌町観光協会、羽幌町商工会、オロロン農業協同組合、初山別村商工会、初山別村観光協会、遠別町観光協会、遠別商工会、遠別漁業協同組合、株式会社遠別産業振興公社、天塩町観光協会、天塩町農業協同組合、天塩商工会、フラワーフレンドリーてしお、天塩川を清流にする会、幌延町観光協会、幌延町商工会、幌延町農業協同組合、NPO法人サロベツ、地域情報受発信システム実行委員会

ルート運営体制(活動団体)
萌える天北オロロンルートでは、活動テーマ:『暮らしぶりの映し。北の光が続く道。』の実現のためにルート運営代表者会議を意思決定機関とし、活動の窓口となる幹事を中心とした運営機構によって、各種活動の調整やルート運営活動計画と具体的な活動との整合・提案・調整などを行います。各活動は、先に示した5つのルートストーリーとキーワードに基づき、活動団体等からの発意によって、プロジェクトを立ち上げます。プロジェクトは、複数のプロジェクト担当および運営機構(代表・幹事、事務局)により構成する「プロジェクト会議」において、ルートストーリーに基づきプロジェクトの整合と相互の調整を検討した上で各種活動を展開します。

	基本方針	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
	ルート運営代表者会議(総会)							● 10/7						
	幹事会			● 6/16					● 11/20			● 2/1		
	プロジェクト会議	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		

ルート名称: 萌える天北オロロンルート	報告者: 留萌開発建設部	報告年月: 2013/3/31
---------------------	--------------	-----------------

	基本方針	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
	行政連絡会議の実施							● 10/7						

4. ルート運営行政連絡会議の取組状況及び課題

ルート名称: 萌える天北オロロンルート			報告者: 留萌開発建設部		報告年月: 2013/3/31		
	ルート(エリア)運営活動計画方針	平成24年度の活動内容	活動実施日	実施機関	成果及び課題	総括	活動No
食	自然の恩恵である地元食材のブランド化と魅力の発信	ヒラメ底建網オーナーin遠別プロジェクト(食材オーナー制度プロジェクト)	6月16日	留萌開発建設部 遠別町 留萌振興局	・イベント運営協力や実施機関の調整および、萌える天北オロロンルートの活動紹介と道路事業を広報するパネル展を行った。 ・課題としては、地域ブランド構築に向けた、今後の支援方策・体制のさらなる充実。	地域ブランド構築のため、継続に向けた行政としての支援体制の検討が必要。	6
景観	愛着と誇りの持てる郷土の景観の保全と創出	景観に配慮した道路付属物の整備計画(案)の作成	2月下旬	留萌開発建設部 留萌市 増毛町	・道路付属物の更新、新設時における景観に配慮した整備の優先順位をまとめた「景観に配慮した道路付属物の整備計画(案)」を作成。 ・H24年度はルートの活動団体等から意見をもらい作成した「景観に配慮した道路付属物の整備計画(案)」について該当自治体と意見交換を行った。	美しいルートの景観保全のため、行政として今後も継続した取組を検討する。	
情報受発信	ルート活動の情報共有	行政連絡会議情報の配布	通年	行政連絡会議全構成機関	・行政連絡会議事務局(留萌開発建設部)が、行政連絡会議全構成機関へ「萌える天北オロロンルート」や行政の活動状況を情報共有するため、情報誌を作成し配布した。 ・課題としては、今後も分かり易い紙面づくりの検討が必要。	今年度は4回の配布であった。今後はタイムリーな情報提供に努め、分かり易く効果的な内容で今後も継続して作成していく。	
	「萌える天北オロロンルート」の地域への浸透	道路情報板での「萌える天北オロロンルート」表示	通年	留萌開発建設部	・留萌開発建設部が、シーニックバイウェイ「萌える天北オロロンルート」を地元や観光客などに認知していただくことを目的に、シーニックバイウェイルート沿線の国道情報板に「萌える天北オロロンルート」の表示を実施。 ・課題としては、情報内容の優先順位が低く、こまめな表示切り替え作業が必要となるため、協力体制の構築が必要。	シーニックバイウェイ及び萌える天北オロロンルートの認知度向上のために、今後も継続的に実施する。	8～11
	「萌える天北オロロンルート」の地域への浸透	ドライブ情報紙の発行	通年	留萌開発建設部、留萌市、増毛町、小平町、苫前町、羽幌町、初山別村、遠別町、天塩町、幌延町	・留萌開発建設部が管内各自治体で開催されるイベント情報を中心にドライブに役立つ情報を提供する「ドライブ情報紙」を夏期を中心に7号発行。管内観光への誘導を目的とし、管内はもとより周辺管外の道の駅にも配置した。 ・この情報紙の周知が不足。	シーニックバイウェイ及び萌える天北オロロンルートの認知度向上のために、今後も継続的に実施する。	11
	「萌える天北オロロンルート」の地域への浸透	「萌える天北オロロンルート」道の駅スタンプラリーへの協力	平成24年6月30日 ～平成24年9月30日	萌える天北オロロンルート運営代表者会議 地域情報受発信システム実行委員会	・前年度よりも多く、2,378人の応募があり、取り組みが浸透している手ごたえを感じた。 ・この取組の周知が不足。	シーニックバイウェイ及び萌える天北オロロンルートの認知度向上のために、今後も継続的に実施する。	10
	ルート情報の提供と創出	萌える天北オロロンルートホームページのリンク	通年	留萌市、増毛町、小平町、苫前町、羽幌町、初山別村、遠別町、天塩町、幌延町、留萌開発建設部	管内9市町村と留萌開発建設部は、萌える天北オロロンルートの広報の為、各行政機関のホームページに萌える天北オロロンルートHPのリンクを掲載した。	シーニックバイウェイ及び萌える天北オロロンルートの認知度向上のために、今後も継続的に実施する。	8～11
	ルート情報の提供と創出	「るもいfan.net」のリンク及び「るもいfan通信」の掲示	通年	留萌市、増毛町、小平町、苫前町、羽幌町、初山別村、遠別町、天塩町、幌延町、留萌開発建設部	管内9市町村と留萌開発建設部は、地域情報受発信システム実行委員会で作成している「るもいfan.net」を各行政機関ホームページにリンクを掲載。また、フリーペーパー「るもいfan通信」を各関係機関庁舎内に掲示した。	シーニックバイウェイ及び萌える天北オロロンルートの認知度向上のために、今後も継続的に実施する。	8～11

5. 平成23年度活動報告への助言に対する状況報告

ルート名称: 萌える天北オロロンルート	報告者: 代表 西 大志	報告年月: 2013/3/31
---------------------	--------------	-----------------

平成23年度活動報告への助言	平成24年度 状況報告	備考
シーニックバイウェイ北海道の持続的かつ発展的な推進を図るため、多様なツール、手法を駆使した情報発信やPR活動を戦略的に行い、ブランドの形成、地域への浸透、海外を含めた他地域との交流促進に努めるとともに、地域ビジネスの展開、人材育成等によるルート活動の基盤強化や幅広い関係機関による支援体制の強化に取り組まれない。	・当ルートの基本的な理念である『あるものを生かし、繋ぐこと』を念頭に、それぞれの地域で発生する課題などを周辺の市町村または活動団体が、発展的な取り組みが出来るように心がけてきた。北海道開発局とのパートナーシップと本制度の中で、萌える天北オロロンルートとしてあるべき活動展開に合致するよう、身近な公共インフラである道路の必要性や、より結びつきが強くなるよう意義を考えてきている。今年度は、新規事業としてルートの中部に位置する地域で、地域資源の掘り起こしから景観のすばらしさはもとより、道路景観などあらゆる角度からたくさんの素材をフィルムに収めた。近年、萌える天北オロロンルートの活動が都市部の方々に与えるスローライフの魅力などがドキュメンタリー番組製作のきっかけとなっていることもあり、映画の撮影地等としての誘致に必要なロケーションや地域情報、あるいは人材などをまとめ、プロモーションをしようと動き出した。こうした活動の根幹には、昨年度ベストプロ優秀賞を頂いた地域情報発信システム実行委員会の活動がある。こうした中で、地域ビジネスの展開や人材交流、シンクタンクの活用と基盤の強化や支援体制が前進してきていると実感している。	

ルート名称: 萌える天北オロロンルート	報告者: 留萌開発建設部	報告年月: 2013/3/31
---------------------	--------------	-----------------

平成23年度活動報告への助言	平成24年度 状況報告	備考
シーニックバイウェイ北海道の持続的かつ発展的な推進を図るため、多様なツール、手法を駆使した情報発信やPR活動を戦略的に行い、ブランドの形成、地域への浸透、海外を含めた他地域との交流促進に努めるとともに、地域ビジネスの展開、人材育成等によるルート活動の基盤強化や幅広い関係機関による支援体制の強化に取り組まれない。	・ルート活動の持続的、発展的な推進をサポートするためには、多様なツール、手法を駆使した情報発信が必要である。そこで、ヒラメ底建網オーナーイベント時に、パネル展示を実施し、地元住民や管外から訪れた方たちに取り組みを紹介する機会を設けた。また、他地域との交流促進を進めるために、管内を訪れる観光客に対して管内での四季折々のイベント情報を発信するためのドライブ情報紙の編集・発行を行い、管内および周辺の管外「道の駅」に配置すると共に、管内限定の「道の駅」スタンプラリーのサポートなどに取り組んだ。 ・ルート活動の基盤を強化するためには、行政担当者のシーニックバイウェイへの理解を深め、共に支える意識を醸成していくことが大切である。このため、「行政連絡会情報」を発行してルートの取り組みなどに関する情報発信を行うとともに、行政連絡会議の場で、関係機関に対して広く情報提供を行い、支援体制の基盤づくりのための支援を行った。 ・ルート活動の役に立てるように、そして、今後も持続可能なルート活動を進めていくために、行政としてのどのような支援・協力ができるか、今後も検討していく必要がある。	